

「食と農」の博物館

展示案内 No.77

展示期間 ■ 2017.10.25 ~ 2018.3.11

東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

TEL.03-5477-4033

FAX.03-3439-6528

(URL) <http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/>

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)

休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

農 民



「食と農」の博物館
東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528
www.nodai.ac.jp/syokutonou



東京農業大学
「食と農」の博物館
NODAI and Syokutonou Museum
TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528
www.nodai.ac.jp/syokutonou

東京農業大学「食と農」の博物館〈企画展〉

農民芸術

— 編まれた民具 —

Agrarian Art - Woven Folkcrafts

平成29年 平成30年
10月25日[水] ~ 3月11日[日]

開館時間：午前10時～午後5時(12月～3月は午後4時30分まで)・入館は開館時間の30分前まで
休館日：毎月最終日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日(大学が定めた日)・入館料：無料

東京農業大学「食と農」の博物館 1階企画展示室A

(オープニングセレモニー)

日時／平成29年10月25日(水)11:30

会場／当館1階 映像コーナー

※共同開催企画展

国際食料情報学部4学科合同展

— つなぐ —

【主催】東京農業大学国際食料情報学部

【会場】同館1階企画展示室A

芸

術

ごあいさつ

企画展「農民芸術 ―編まれた民具―」の開催にあたって

東京農業大学「食と農」の博物館では、「農民芸術 ―編まれた民具―」をテーマとして企画展を開催いたします。

当博物館は、全国から集められた約3,600点もの農機具を収蔵しています。そのうち数十点を当博物館2階に常設展示しております。また東京都港区赤坂にある三会堂ビル1階ロビーに、大日本農会様のご仲介を頂き、所有者でもある一般財団法人農林水産奨励会様のご厚意により、2017年10月25日現在「唐箕」1台ではありますが、展示しております。それらの展示物をご覧になられた皆様より、大変ご好評を頂いております。

古農具には、それが使われた地域の自然や農業条件に順応した機能性を持ち、地域に生きる人々の知恵や文化が組み込まれた貴重な学術情報といえます。わが国の農業は、人力から蓄力そして機械動力へと技術革新によって生産力を高めてきました。生産力や機能性を追い求める中で、技術革新によって人々が大きな労苦から解放されることは喜ばしいことであると同時に現実として、自然と共生する循環型で持続的な、それぞれの地域に根付いた優れた文化が失われつつあるのです。

農林資源である藁・シュロ・萱・竹やその他の木材などを材料とした古農具や民具は、先人たちの知恵が随所に盛り込まれた、人が使用する上での機能性を最大限に有した作品ともいえます。特に編まれた民具を細かく見ていただくと、風雨の強さや雪の深さなどの風土への対処を考えた“巧”が感じられ、そのひとつひとつが使う人への“やさしさ”として、造り手が可能な限りの技法を駆使していたことが時を遡って感じられるのです。まさに日本人の“思いやり”の心そのものが、民具には編み込まれているのです。そのやさしさと巧が、期せずして民具の“編み”中に“美”を見せてくれました。我々はそれを「農民芸術」として今回、提示させていただきました。

昨年度の企画展で東京農業大学の前身、東京高等農学校初代校長を務めた田中芳男没後100年の節目の年として「田中芳男と東京農業大学 ―博物学から近代農学へ―」をテーマとして企画展を開催いたしました。明治37年田中芳男が設置した東京高等農学校標本室に収蔵されていた古農機具に対しても田中芳男の心の中には、古農具や民具に込められた人々の思いや技法を後世へと“つなぐ”気持ちが進められていたのではないかと思います。世界の農業と農学分野の教育・研究の大きな拠点である東京農業大学の農業博物史を財産とする考えは、当企画展においても田中芳男より脈々と継承されているものであると考えます。

私は、本学が標榜する実学とは「温故知新」の心を先端的研究者が持ち続け、歴史や博物学によって収蔵された情報を新たな視点から紐解くことでもあると考えます。そのことが現代の農学の大きな発展に繋がるのではないのでしょうか。本企画展をご鑑賞いただく皆様には、古農具から伝わる先人たちの技術や心を感じていただければ幸いです。

最後になりますが、本企画展にご協力いただきました多くの関係者の皆様にご挨拶申し上げます。

東京農業大学「食と農」の博物館
館長 江口 文陽

平成29年10月25日

民具が何故、芸術なのか

芸術とは「一定の材料・技術・身体などを駆使して、鑑賞的価値を創出する人間の活動およびその所産。絵画・彫刻・工芸・建築・詩・音楽・舞踊などの総称」とされている(広辞苑)。その定義はともかくとして、ここに示されているように芸術の対象は広い。現代に至っては服飾(ファッション)・パフォーマンスなども加わって、それこそ多彩である。

今回の展示テーマである編まれた民具に美を見出し、「農民芸術」として紹介することは挑戦的な試みではあるが、本学の収蔵資料を理解する上で新たな視座をもたらすであろう。

民具とは古から農民や民衆の中で生み出されてきた農具や生活具である。実際、今に残る民具は殊に農具類は汚れて、破損し、すり減り、農民たちの生活を援け続けたが故に草臥れて、今にも捨てられそうな相貌である。また、これらは「ガラクタ」と揶揄されることもある。一見そこに「鑑賞的価値を創造する人間の活動および所産」としての芸術を見出すことは難しいようにも思える。だが、それらが人間の生活を支えるための知恵を反映したものであれば、重要な文化財であると同時に、その合理性に富んだ造形故に美しさをも併せ持っているのではなかろうか。

当館は農学系の大学博物館である。理系と文系・社会系と分けるならば農学は理系に入るだろう。しかし農学は理系のための視点で語れるものではなく、農業あるいは農民とその生活をはじめ社会の様々な問題をも検証対象とするのであり、社会系とまさにクロスオーバーしている。そういった観点から見た「芸術」を提示してみたいのである。

遡れば「日本の博物館の父」と称され、本学前身の東京高等農学校初代校長である田中芳男が



写真1 万能 岩手県花泉町(現・一ノ関市)
泥除けとして藁で編んだもの(右上・拡大写真)を柄に装着してある。

万能は、稲株起こしや水田の畦畔作りに使われる農具である。藁で編まれたものが装着されることで、不思議と美しい民具にも見えてくる。

設置した標本室に由来する当館には農具収集の歴史がある。それらは戦時中にすべてを焼失してしまったが、戦後、新たにその収集の精神を受け継ぎ、全国の校友や父兄の協力により寄贈された農具類が収蔵され、教育研究に活用されてきた。それらの中には一際美しい造形で農民の手によって藁や竹などで編まれた民具(写真1・2)が数多くあるが、これまで殆ど公開されたことはない。そこで、本展をとおして華やかな「美」とは遠い存在である民具に宿る、農の生業の中に生きてきた美しさを紹介してみたい。特に稲藁を用いた民具が多く存在することから、これを中心に解説する。

今日、最先端技術が導入された農業が展開し、一方で過疎化が進む地域がある中、地域創成や農村の再生に関する問題の議論が絶えない。厳

しい環境下で農民が自らの農業と暮らしを守り生き抜く為に生み出し、企図せず美しさを湛えた民具を展示することで、その問題解決に結びつくヒントが見出せればと考えている。

解説に入る前「農民」という言葉について触れてみたい。この言葉には百姓一揆や農民一揆、更には江戸時代に自分の田畑を持つもつこともままならない貧しい農民たちのイメージから、基層社会で辛く悲しく生活を送った人々、という差別的意味合いを包含しているかのような誤解を招きかねない。しかし一方で近代に入って、農民文学・農民作家といった農民というアイデンティティを誇るような表現や、宮澤賢治のように農民の生活と芸術を結び付けた農民芸術の思想などが生まれてきた。いずれにしても農民は、言葉だけではなく彼等自体、大地と力強く結び



写真2 シュロ蓑 神奈川県横浜市(大正10年製作)

ついてきた存在であり、基層社会どころか国や社会の根底を支えてきた大きな存在なのである。

人と自然の造形

藁とは稲や麦などの茎を乾燥させたものである。こうした藁には神が宿るとされ、人々がそれぞれの土地で守ってきた信仰や農耕儀礼と深く関わってきた。農民たちが豊作への祈りや家内安全など様々な思いを抱き、脈々と作り続けてきたそのような民具は、日本人の生活を支え続けてきた実用の極として、そのこと故の美しさを放っているのである。

古農具類の木製民具は使いこまれると、土や埃で汚れはしても黒く光りを放ち、その造形が一層美しく見えることがある。一方の藁や菅・藎草などで編まれた民具は破損すれば補修もされるが、いずれ燃やされるか堆肥として田畑に還元されるので、消滅を前提としたモノである。だがそれが消滅したとしても、それを作る技は祖先より伝承され、世代を超えて新たに再生さ

れる「藁の文化」を作ってきた。その消滅と再生こそがこの民具を更に美しく見せているのかも知れないし、そこには子孫へ伝わる「技のDNA」が存在している様でもある。

現代的には芸術と言えばアーティストが、ある思想を持って取り組む活動の世界で注目され、また美術作品の作者である彼らは話題にもなる。民具を作る人々は、思想などを表現したりする様な意図はない。農民は個性や独自性をアピールする訳でもなく、必要に応じて慎ましくただ実用性のみを考えて道具を作ってきたのである。それ故、作者として名を残す訳でもなく、現存する民具は誰が作ったかは分からない。編まれた民具は、藁をはじめとする天然素材と熟練された手わざで出来上がった人と自然の造形という解釈もできる。

民具の周辺と作る人

農民たちはいつ、どのような場で藁などを用いた民具を作ってきたのだろうか。殊に冬が長く雪深い東北ではその季節、必然的に家に籠っての藁仕事が多くなる。冬の生活具である藁グツや蓑、藁帽子をはじめ春を迎えて始める野良仕事で使用される縄や筥、米収穫時で用いる俵など、また正月を迎えるための注連縄や農耕儀礼用のお飾りも、殆どが土間で作られていた(写真3)。

土間は日本古来の伝統家屋に見られる様式であり、板床のない土の部分で内庭とも呼ばれる。とりわけ農家の土間は広く、竈を配置し台所の機能を有し、井戸をも備えていたところもあった。また牛や馬を飼う厩もひとつ屋根の下にあったため、その隣に保管される藁は飼葉としてすぐ利用できた。藁打ちの台として使用する大きな石も半分程、土間の隅の方には埋められている。土間は冬期間の仕事の多くが完結する場でもあった。筆者の郷里の岩手県奥州市胆沢地方では力の要る藁仕事は殆どが男たちだったという。女たちは農良着の“しきしつぎ”(裁縫)と家事で忙しかったのである。

子供の頃、父母に連れられ雪深い奥羽山脈の麓にある本家を訪ねたときだった。土間で藁仕事をしていた大叔父が出迎えてくれた。茅葺屋根の大きな古民家の土間は電球ひとつと障子窓



写真3 土間で行っている藁仕事(提供:奥州市教育委員会歴史遺産課)

越しに射し込む外光だけで薄暗かった。今にして思えばその昔、まだ電球のなかったころは更に薄暗かっただろう。また土間を上がった黒光りする板床に囲炉裏があり、薪が赤く燃え立ち上がる焔と煙が、子供心に不気味に思えた。馬糞で駆け抜けてきた雪原と、辿り着いた薄暗い土間のコントラストはまさにモノクロームの世界だった。古い民具、特に編まれた民具はこの時に見たような環境で生み出されてきたのだ。

農民は厳しい暮らしの中で、必要に応じて民具を作らなければならなかった。雪国での必需品のひとつである藁グツ(写真4)は、とりわけ藁仕事の中でも傑作といわれている。郷里で暮らす90歳余りの古老は「自分や家族が履くものだが、他人からも見られるので、かっこよく作る」、また「上手に作る人は羨ましいと思った」と昔を思い出すように語ってくれた。本格的な野良仕事が始まる遠い春を待つ、雪国農民の一時の美への拘りが見えてくる。



写真4 藁グツ 新潟県津南町

編まれた民具

・藁とその作業

植物性素材を利用した民具の中で、利用度の大きかったのは藁であった。米作りの副産物として藁は農民にとって身近に存在するもので、容易に手に入れることができ、加工し易く扱い易い。

藁があったから農民の生活が成り立ったとも言われている。民俗学者の宮本常一氏は著書の中で『畑が広く水田の少ない対馬では、藁ほしさのために藁小作といって、米はすべて地主に納め、藁だけ貰う小作があった。また、青森県下北半島は明治の中頃まで米のできぬところであったが、藁を入手するために米をたべたという。米は俵に入れて送られてくる。その俵を解いて藁を利用したそうである。身をつきさされるような話である』と紹介していた。それだけ藁は農民にとって必需品だったのである。

風雪や雨から身を護る防寒具をはじめ、農作業や暮らしの為の実用品を挙げれば実に多い。被りものや背蓑、腰蓑をはじめ、草鞋や草履、藁グツなど全身を藁で覆う程のものがあるとされ、また正月や農耕儀礼のお飾りをはじめとする生活具や玩具、そしてかつては一つ屋根の下で飼われ家族同然だった牛馬が身に着ける草鞋や蓑もあり、家畜を労わる農民の想いを伺わせ



写真5 藁打ち(奥州市教育委員会歴史遺産課)

る民具も存在して、挙げればきりが無い。

民具を作るうえで最初に行うのは、藁スグリで、筆者の郷里では「藁スゴキ」と呼ばれる藁の株元の葉を扱落す作業で、櫛歯状の道具を使う。直接手によって行うこともあるが、これだと手を傷めることがあり、筆者も苦い経験がある。次に土間にある石の上で木槌による藁打ちを行う(写真5)。これは藁を叩いて柔らかくする作業であり、これによって、藁仕事が容易に柔軟になり、藁が強靱なものとなる。その表面には光沢も現れ、編れる藁が美しい姿を見せ始める瞬間である。

・美の多様性

藁仕事の中で縄なえ(写真6)は最も単純な技術である。両手で藁を撚りあわせるこの作業は、父親の仕事をまねて子供でも遊びの中で覚えられる。だが、編まれた民具は実に多彩である。例えば蓑を一つ取ってみても、形や編み方が違ったりしている。藁だけで作られていると思ったら、他の植物素材を取り入れて編んでいるものもある。さらには赤や黒、白などの布切れを用いて編んだ蓑や、荷物を背負って運ぶバンドリ(写真7)は、形やその技法が多様で地域



写真6 縄なえ(奥州市教育委員会歴史遺産課)



写真7 バンドリ(複製) 山形県庄内地方
名称の由来は、蓑や背中当ての形が、ムササビ(バンドリ)に似ていることから名付けられたともいわれている。

差がある。中でも山形県庄内地方に見られる嫁入り道具を運ぶ「祝いバンドリ」は、編みこんだ布切れが彩りを添え素朴で美しい。国指定の重要有形民俗文化財にもなっている。鶴岡市にある致道博物館の展示解説によると『かつてこのバンドリは婚約が決まれば、男性から女性に贈られた』という。封建時代の中で実にロマンスに溢れる美しい話である。

編みに関しては宮崎清氏によると、箆編みや俵編みをはじめ猫編み、草鞋編み、巻編み、蓑編み、網編みと言った技法が紹介されており、どれを見ても美しく繊細な編みである。企画展の準備のため写真家と共に学生たちも参加して、編まれた民具の写真撮影を行った。撮影では「テザー撮影」と呼ばれるカメラからUSBケーブルでパソコンに繋げ画面上に民具が映し出される。その編みの細部が画面に現れる度に、普段では見られないその意匠の細かさに驚いたのだろうか、声を上げながら見入っていた学生たちの姿が印象的だった。古来の技が最先端の技術で細部まであらわにされることの面白さとともに、編まれた民具の美しさ故に、学生たちをも惹きつけたのだろう。農村を度々訪ねているある研究者は、「蓑の裏側を広げた時に見える編みの

模様は杭に掛けて稲藁を乾燥している風景の様であり、また畑一面に広がる畝の様でもある」(写真8)と語った。

一体このような編みの多様な技法を農民はどのようにして考え出してきたのだろうか。藁をはじめ様々な植物素材を積極的に利用し、貧しいながらも暮らしの民具を作りだしてきた農民の技術と感性の高さを改めて知ることができる。

限られた条件の中で自らの生活を何とか豊かにしようとする心の持ちようは、現在の農村や農業に関わる者も等しく持ち合わせているのだろうか。農村の過疎化が進む中、多くの民具は消え、地域社会で育まれてきた農耕儀礼をはじめ、様々な民俗芸能の存続に影響を及ぼしかねない文化の衰退が続いている。現存しているとすれば博物館や資料館の資料となり、また観光用の民芸品に姿を変えている民具もあり、その使われ方に本来性は失われている。

農村も殆ど都会とは変わらない生活となった。それは、都会的な文化とか、考え方が農村を吸収しているからだろうか。地域創成と農村の再生という課題に対して、最先端的な技術や思想が一方的に持ち込まれているようにも思える。厳しい環境と制約の中であっても、芸術とも劣らない民具を生み出してきた、かつての農村、そして農民の文化の豊かさに感嘆し、素直に学ぶことが地域創成と農村の再生へと繋がる一歩のように思える。

(黒澤弥悦)



写真8 蓑の裏側

藁馬の尻尾 —無銘を編む—

農村地域に残る年中行事には藁馬がしばしば登場する。田の神や年神に、火(かまど)の神や道祖神に、あるいは祖先霊への捧げものとして藁馬は欠かせない祭具であるとともに、民俗信仰を背景にした美意識の高い非日常の民具ともいえよう。馬は農村の貴重な労力だが、時に神の乗り物になり、あるいは神や穢れを直接象徴してきた。

神へ捧げられる藁馬は、農民の副次的な仕事として編まれた無銘性と、短期間で消滅する一過性のものであるが故の、淳朴(じゅんぼく)な簡潔さをもっている。用具ではないため製作の技は習熟されても規格化されず、専門化されないことも藁馬が素朴さを失わない所以と思われる。一方民芸品として保存性や鑑賞を目的としたものは小奇麗な仕上がりとなって、いささか面白みを欠くようになる。

造形的な醍醐味は、最も単純にして最も的確



コトコト馬 岡山県高梁市有漢

正月十日の夕刻、藁馬を持った子供が家々を訪れ、家人にみつからないように藁馬を、時には木彫りのカマやセンバコキを負わせて縁側に置き、コトコトと縁や戸を叩く。家人は「馬子さん馬をこうたでえー」などと言いながら、餅や祝儀を置いておく。神棚に祀られた馬は、翌日「大鋤初め」の行事の際に、お供物や神酒とともに苗代田に奉納される。特徴的な伸びきった後肢は、他の藁馬にみられない造形表現である。

に捉えられた馬の要素が、藁という天然の素材を最小限に加工することで荒々しく形になって顕れるところだろう。直立した頸、頑丈な胴、まっすぐに伸びて跳ねんばかりに力強い四肢。往々にして藁の穂先をそのまま残した尻尾やたてがみの工夫。藁馬の持つ生命力や神性は、そのまま藁の持つ生育、実り、温もり、といった豊穣を象徴する力なのだ。こうした藁という素材が持つ農村共同体の記憶が馬の形と二重写しにな



馬っこつなぎ 岩手県花巻市大迫町内川目

旧暦6月15日は、田の神(牛頭天王)を津島神社の天王祭に合わせて送り出す日である。

この日、乗用と荷付用の一対の藁馬(牡牝)を、田の水口や神社に2頭繋ぐように奉納し、その口にはシトギを藁の葉で包んだものを含ませる。藁馬の代用として、和紙に摺った馬の絵も添えられるが、作り手の少なくなった藁馬のひとつである。

り、聖性を帯びた藁馬となる。

各地の祭礼は無形文化財として保全されるが、その中で重要な役を担う藁馬製作を維持していくには、祭りの主役である子供や伝承を担う高齢者の力、そして丈の長い藁や、時には穂付きの藁も必要になる。コンバインで切断されることのない長い藁は、手刈りによってのみ確保される。手刈りした稲の干し方には風土が色濃く反映され、数多くの方法と呼称があり、ハセ掛けや杭掛けのように掛けるものから、藁塚のように積むものなど、実に様々な形を生みだしてきた。もし、このような藁作りが復活すれば、まるで生態連鎖するかのように、農村から消えた手仕事の風景と地域の個性が甦るだろう。

藁ばかりでなく、七夕馬やカヤカヤ馬は、かつてマコモやカヤで作られるところも多くあったが、近代化に伴う生活形態の変化に伴い、茅葺屋根、筵などの需要が低下し、藁で代用されるようになった。マコモは「神の宿る草」ともいわれ、注

連縄をはじめとする神具に供され、また食用のマコモダケ、漆工芸用のマコモ粉を産するなど、地域の文化を支えてきた。しかし、費用対効果を度外視した作物の生産は低迷し、また水場の生育環境も消滅するなどして大幅に生産が減少した。

こうしてみると、地方ごとの手仕事と栽培種の多様さが、農民文化を形作ってきたという事実が浮かびあがる。農業のあり方が単一化に向かえば、文化も単一化し瘦せてしまう。「農民芸術」とは、こうした手仕事や栽培種の地方性を背景にしてこそ、初めて成り立つものなのだろう。そして「農民芸術」が、いわゆる芸術とは一線を画した清しい輝きを発散しているとすれば、それは基底にある物が個人の思想や感性ではなく、共同体の祈りに多くを依っているからに違いない。

(木村李花子)



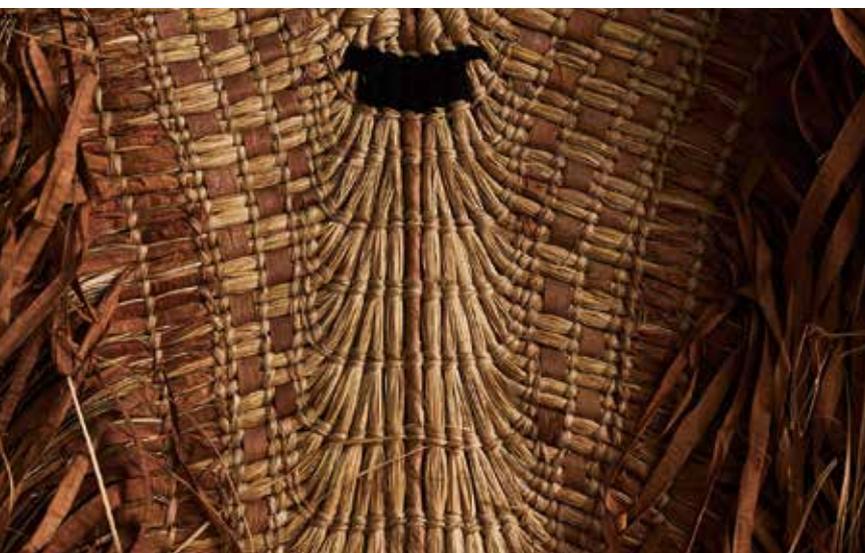
カヤカヤ馬(七夕馬) 千葉県東金市押堀

房総地域でのカヤカヤ馬は、地域ごとに数多くのバリエーションがあり庄巻だ。旧暦7月7日に、カヤやマコモなどで馬や牛を作り台車に乗せ、刈った草や麦わらを馬に背負わせて、台車を引いて家に連れ帰る子供の行事である。1日庭先に飾った牛馬は屋根に投げ上げられたり、カマド神、荒神あるいは屋敷神などに納められたりする。赤い飾りは梅酢で染められた。

民具の「編み」の世界

蓑

収集地：新潟県松之山町
(現・十日町市) 1965年







蓑(外側)

収集地：静岡県清水市 1972年



蓑(内側)

収集地：静岡県清水市 1972年







ツケミノ

収集地：福島県南会津郡檜枝岐村 1971年
スゲ、山ぶどうを素材とし、4日間かけて制作
されたという。





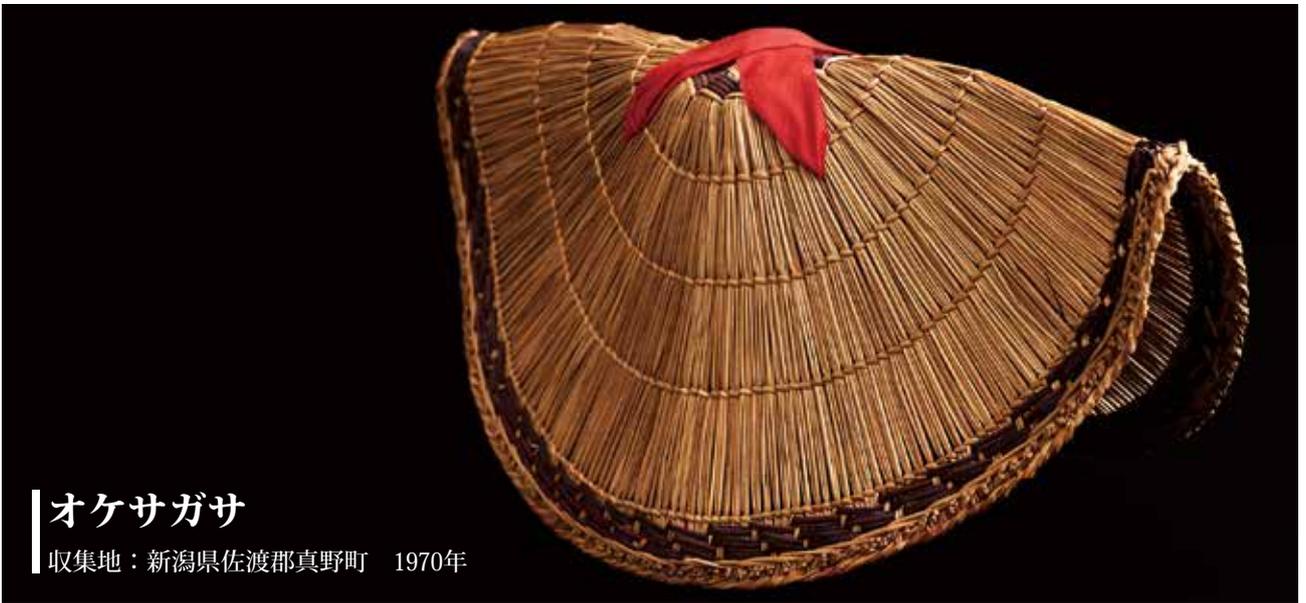
編笠

収集地：千葉県八日市場市 1968年



編笠

収集地：岩手県西磐井郡花泉町 1971年



オケサガサ

収集地：新潟県佐渡郡真野町 1970年



撮影：鈴木 迅(本学畜産学科 平成13年卒)

結び

本展の企画準備で民具や民俗の書籍関係を読みあさっていた。宮本常一著作集「民具試論」の編者に田村善次郎とあり、また田村氏の著者「藁の力 一民具の心と形一」のプロフィールには東京農業大学農業経済学科卒、現在、武蔵野美術大学名誉教授とあった。民具をとおして、まさか本学の大先輩を知ることになるとは思ってもみなかった。不思議なご縁と感じた。もとより家畜の科学を対象とする筆者は、民俗や民具について素人同然であっただけに、本学の先輩ということで、頼る思いで田村先生に電話を試み、ご相談をさせて頂いた。快くご教授を賜り、色々と資料も送って頂いた。

田村先生のお話の中で、宮本常一先生のことや、「昭和30年頃の学生時代は、農業経済学科や林学科の先生方と一緒に農山村への調査を繰り返していた」というお話しが印象深かった。当時の農山村の情景や、そこで使われていた民具が一瞬、先生のお話をとおして見えてくるようだった。

また、今回の展示に「農民芸術」と銘打ってはみたものの、民具と芸術をどの様に結びつけたら良いのか逡巡していた時、ある美術館に誘われる様に自然に足が向いていた。そして、とっさに声をかけた学芸員の方に「農学のご専門の方が取り組む芸術の企画展、大変興味があります。頑張って下さい。」と励まして頂いた。出会いをとおして準備にも心が弾んだ企画展でもあった。

筆者の郷里で藁工房を開設している小野寺延吉氏(85歳)を訪ねた。「藁仕事は、物を生かす、工



写真 藁仕事を行う小野寺延吉氏(岩手県奥州市胆沢区)

夫する、知恵を働かせる、先人の多くの知恵が凝縮された伝統作業です」と語る。工房で小野寺氏の作業を見ているとまったく飽きることがない。そして何の変哲もないただの藁が美しく造形されていく様に改めて驚かされたのである(写真)。

企画展が開催される頃、秋の深まる郷里では脱穀の作業を終え、良質な藁が得られる時期でもある。だが現在、殆どが大型機械のコンバインで脱穀と同時に、稲の茎は切断され瞬時に水田に撒かれ還元されてしまい、藁は生産されなくなった。これにより藁を編む文化が失われ、その造形の美しさも永遠に失われてしまうのだろうか。

(Y)

参考資料

- 宮崎 清 『藁(わら)』1 法政大学出版会 2001年
宮澤賢治 『覚書・手帳』 新校本 宮澤賢治全集 13巻上 筑摩書房 1997年
宮本常一 『民具学試論』 宮本常一著作集 45 田村善次郎編 未来社 2005年
奥州市教育委員会 『第19回胆沢郷土資料館企画展 胆沢のわら細工』 2013年
佐藤健一郎・田村善次郎 『藁の力-民具の心と形-』 淡交社 2009年

協力

- 機関・奥州市教育委員会歴史遺産課、小野寺わら工房、東京農業大学学術情報課程
個人・武蔵野美術大学名誉教授・田村善次郎、本学「食と農」の博物館元副館長・梅室英夫、
本学応用生物科学部教授・寺本明子、写真家・鈴木 迅

本展のポスターは、デザイン工房エスパス・木村正幸氏の御好意で、2種が制作された。「農民芸術」という企画展であるが故に、農大の学生たちにはその芸術について深く考える機会になればと、願ってのことである。

表紙の黒を基調としたポスターのイメージは、農民の歴史・民俗文化など、その背景をも考えさせてくれる。また本ページの白を基調としたものは、「農民芸術」が現代的アートにも繋がるという挑戦的なデザインでもある。

東京農業大学「食と農」の博物館
(企画展)
農民芸術
— 編まれた民具 —
Agrarian Art - Woven Folkcrafts

平成29年 10月25日[水] ~ 平成30年 3月11日[日]
開館時間：午前10時～午後5時(12月～3月は午後4時30分まで、入館は開館時間の30分前まで)
休館日：毎星期日(年末年始の都合は除く)・毎月第1・3・5日(大学が休みの日)・入館料：無料
東京農業大学「食と農」の博物館 1階企画展示室A

【オープニングレセプション】
日時：平成29年10月25日(水)11:30
会場：当館1階 映像コーナー

東京農業大学「食と農」の博物館
〒188-8502 東京都練馬区上野原2-1-20
TEL:03-6477-0021 FAX:03-6478-0028
www.nodai.ac.jp/ryokutsumo

●204機関誌出版部
国際食料植物学部4学科合同編
「つなぐ」
【主催】東京農業大学国際食料植物学部
【会場】同部1階企画展示室A

企画・主催：東京農業大学「食と農」の博物館
企画展示 農民芸術 —編まれた民具—実行委員会
委員長 上岡美保（「食と農」の博物館副館長）
委員 黒澤弥悦、安田清孝、西嶋 優、大石康代、村山千尋（「食と農」の博物館）
木村李花子（学術情報課程）
展示デザイン・製作 STUDIO HOOK 志田定幸

平成29年度の特別展・企画展

■特別展「微細藻類の輝かしき未来」—健康・環境・エネルギー資源としての可能性に迫る—
会期：2017年4月26日(水)～8月6日(日)

■特別展「鶏 —クラシックブリードの世界—」
会期：2017年8月30日(水)～10月15日(日)

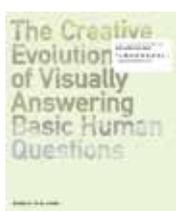
.....
■企画展 古農具展Ⅱ「農民芸術」—編まれた民具—
会期：2017年10月25日(水)～2018年3月11日(日)

■企画展 国際食料情報学部4学科合同展—つなぐ—
会期：2017年10月25日(水)～2018年3月11日(日)

刊行物のお知らせ

■図録『ピーター・メンツェル&フェイス・ダルージオ 地球の記録20年の軌跡 「しあわせのものさし」—持続可能な地球環境をもとめて—』

(内容) 人々の営みに様々な問いかけをもちながら、20年にわたり世界中を旅した報道写真家とあるがままの事実を綿密に記録したジャーナリストでありプロデューサーでもあるパートナーとの壮大なプロジェクトを物語る写真展の図録である。



(判型) A4判変型 横型 並製 88頁
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年6月1日
(価格) 2,600円+税

『農の暮らしに生きた女わざ』

(内容) その土地特有の自然と共存しながら長い間祖先から受け継いできた生活文化は、名もなき多くの女たちによって守られてきた。女たちが必死に紡いできた生活文化を、ともすると顧みられることもなく、当然のように捨てられてきたであろうただの「布」たちが語ってくれる。



(判型) B5判変型 上製 144頁
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館
(監修) 森田瑠子 修紅短期大学名誉教授、「女わざの会」代表
(装丁・デザイン) 木村正幸・山本亜希子(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年3月10日
(価格) 2,500円+税

『日本人と馬 —埒を越える十二の対話—』

(内容) 信仰・民俗・歴史・考古・社会・科学・芸術と多分野にわたる識者達による対話が、様々な角度から人と馬の関係を照らし出す。



(判型) A5判 上製 420頁
(企画・製作) 東京農業大学「食と農」の博物館、東京農業大学教職・学術情報課程
(編集) 設立10周年記念特別企画展示実行委員会と「十二の対話」委員会
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成27(2015)年3月30日
(価格) 4,000円+税

『樹木の形の不思議』

東京農業大学短期大学部環境緑地学科・特定非営利法人樹木生態研究会 編
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成26(2014)年3月20日 発行
A5判 並製 158頁 2,000円+税

『耕す —鋤と犁』

東京農業大学「食と農」の博物館 編
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成25(2013)年3月30日 発行
A5判 並製 115頁 1,500円+税